TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★★☆ ながい　988語

How Fire was brought to the Indians

アメリカの先住の人たちに火がとどいたおはなし

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Raybrite

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　火をもたないアメリカの先住の人たちはこごえそう。地上の火はぜんぶ、いじわるなふたりのおばあさんが見はっています。わかものは動物たちに助けをたのみますが……。

PART I. SEIZING THE FIREBRAND.

Oh, it was so cold! The wind blew the leaves about on the ground. The frost spirit hid on the north side of every tree, and stung every animal of the forest that came near. Then the snow fell till the ground was white. Through the snowflakes one could see the sun, but the sun looked cold, for it was not a clear, bright yellow. It was almost as white as the moon.

The Indians drew their cloaks more and more closely around them, for they had no fire.

"How shall we get fire?" they asked, but no one answered.

All the fire on earth was in the wigwam of two old women who did not like the Indians.

"They shall not have it," said the old women, and they watched night and day so that no one could get a firebrand.

At last a young Indian said to the others, "No man can get fire. Let us ask the animals to help us."

"What beast or what bird can get fire when the two old women are watching it?" the others cried.

"The bear might get it."

"No, he cannot run swiftly."

"The deer can run."

"His antlers would not go through the door of the wigwam."

"The raven can go through the door."

"It was smoke that made the raven's feathers black, and now he always keeps away from the fire."

"The serpent has not been in the smoke."

"No, but he is not our friend, and he will not do anything for us."

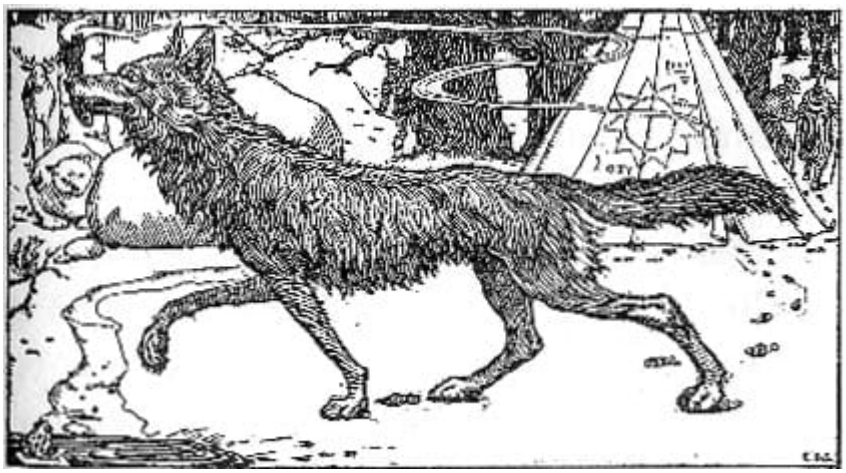
"Then I will ask the wolf," said the young man. "He can run, he has no antlers, and he has not been in the smoke."

So the young man went to the wolf and called, "Friend wolf, if you will get us a firebrand, I will give you some food every day."

"I will get it," said the wolf. "Go to the home of the old women and hide behind a tree; and when you hear me cough three times, give a loud war-cry."

Close by the village of the Indians was a pond. In the pond was a frog, and near the pond lived a squirrel, a bat, a bear, and a deer. The wolf cried, "Frog, hide in the rushes across the pond. Squirrel, go to the bushes beside the path that runs from the pond to the wigwam of the two old women. Bat, go into the shadow and sleep if you like, but do not close both eyes. Bear, do not stir from behind this great rock till you are told. Deer, keep still as a mountain till something happens."

The wolf then went to the wigwam of the two old women. He coughed at the door, and at last they said, "Wolf, you may come in to the fire."



The wolf went into the wigwam. He coughed three times, and the Indian gave a war-cry. The two old women ran out quickly into the forest to see what had happened, and the wolf ran away with a firebrand from the fire.

PART II. THE FIREBRAND IN THE FOREST.

When the two women saw that the wolf had the firebrand, they were very angry, and straightway they ran after him.

"Catch it and run!" cried the wolf, and he threw it to the deer. The deer caught it and ran.

"Catch it and run!" cried the deer, and he threw it to the bear. The bear caught it and ran.

"Catch it and fly!" cried the bear, and he threw it to the bat. The bat caught it and flew.

"Catch it and run!" cried the bat, and he threw it to the squirrel. The squirrel caught it and ran.

"Oh, serpent," called the two old women, "you are no friend to the Indians. Help us. Get the firebrand away from the squirrel."

As the squirrel ran swiftly over the ground, the serpent sprang up and tried to seize the firebrand. He did not get it, but the smoke went into the squirrel's

nostrils and made him cough. He would not let go of the firebrand, but ran and ran till he could throw it to the frog.

When the frog was running away with it, then the squirrel for the first time thought of himself, and he found that his beautiful bushy tail was no longer straight, for the fire had curled it up over his back.

"Do not be sorry," called the young Indian across the pond. "Whenever an Indian boy sees a squirrel with his tail curled up over his back, he will throw him a nut."

PART III. THE FIREBRAND IN THE POND.

All this time the firebrand was burning, and the frog was going to the pond as fast as he could. The old women were running after him, and when he came to the water, one of them caught him by the tail.

"I have caught him!" she called.

"Do not let him go!" cried the other.

"No, I will not," said the first; but she did let him go, for the little frog tore himself away and dived into the water. His tail was still in the woman's hand, but the firebrand was safe, and he made his way swiftly across the pond.

"Here it is," said the frog.

"Where?" asked the young Indian. Then the frog coughed, and out of his mouth came the firebrand. It was small, for it had been burning all this time, but it set fire to the leaves and twigs, and soon the Indians were warm again. They sang and they danced about the flames.

At first the frog was sad, because he was sorry to lose his tail; but before long he was as merry as the people who were dancing, for the young Indian said, "Little frog, you have been a good friend to us, and as long as we live on the earth, we will never throw a stone at a frog that has no tail."

第1部　もえる木をうばえ

ああ、なんてさむかったことでしょう！風が地面の木の葉をふきちらしていました。しもの精がどの木の北がわにもかくれていて、近づいてくる森の動物をかたっぱしからちくりとさしました。それから雪がふって、地面はまっ白になりました。雪のあいだからお日さまが見えましたが、お日さまはつめたそうでした。すんだ明るい黄色ではなかったのです。お月さまと同じくらい白っぽかったのです。

アメリカの先住の人たちは火をもっていなかったので、マントをますますしっかりと体にまきつけました。

「どうしたら火が手に入るだろう？」と人々はききましたが、だれも答えませんでした。

地上の火はぜんぶ、アメリカの先住の人たちをきらっているふたりのおばあさんのウィグワムの中にありました。

「あの人たちには火をやるものか」とおばあさんたちは言って、だれももえる木をもっていけないように、昼も夜も見はっていました。

とうとう、アメリカの先住の人たちのわかものがみんなに言いました。「人間にはだれも火をとってこられない。動物たちに助けてもらおう。」

「ふたりのおばあさんが見はっているのに、どんなけものや鳥が火をとってこられるっていうんだ？」とみんなはさけびました。

「クマならとってこられるかもしれない。」

「いや、クマは速く走れない。」

「シカなら走れる。」

「シカのつのは、テントの入り口を通れないよ。」

「カラスなら入り口を通れる。」

「カラスの羽が黒くなったのはけむりのせいだ。だから今では、カラスはいつも火に近よらないのさ。」

「ヘビはけむりの中に入ったことはないよ。」

「そうだけど、ヘビはわたしたちの友だちじゃない。わたしたちのために何もしてくれないよ。」

「それなら、オオカミにたのんでみよう」とわかものは言いました。「オオカミは走れるし、つのもないし、けむりの中に入ったこともない。」

そこでわかものはオオカミのところへ行って、よびかけました。「オオカミくん、もえる木をとってきてくれたら、毎日食べものをあげるよ。」

「とってきてあげよう」とオオカミは言いました。「おばあさんたちの家へ行って、木のうしろにかくれていておくれ。わたしがせきを3回したら、大きなときの声をあげるんだ。」

アメリカの先住の人たちの村のすぐそばに、池がありました。池にはカエルが1ぴきいて、池のそばにはリスとコウモリとクマとシカがすんでいました。オオカミはさけびました。「カエルくん、池の向こうがわのアシのしげみにかくれていておくれ。リスくん、池からおばあさんたちのテントへつづく道のそばの、やぶの中へ行っておくれ。コウモリくん、かげに入って、ねむりたければねむってもいいけれど、両方の目をとじてはいけないよ。クマくん、言われるまでこの大きな岩のうしろから動かないでおくれ。シカくん、何かがおこるまで、山のようにじっとしていておくれ。」

それからオオカミは、ふたりのおばあさんのテントへ行きました。オオカミが戸口でせきをしていると、とうとうおばあさんたちは「オオカミや、火のそばに入ってもいいよ」と言いました。

オオカミはテントの中に入りました。オオカミがせきを3回すると、わかものがときの声をあげました。ふたりのおばあさんは何がおこったのか見ようと急いで森へかけ出し、そのすきにオオカミは火の中からもえる木を1本くわえてにげました。

第2部　森の中のもえる木

オオカミがもえる木をもっているのを見て、ふたりのおばあさんはかんかんにおこり、すぐにオオカミをおいかけました。

「うけとって走れ！」とオオカミはさけんで、もえる木をシカになげました。シカはそれをうけとって走りました。

「うけとって走れ！」とシカはさけんで、もえる木をクマになげました。クマはそれをうけとって走りました。

「うけとってとべ！」とクマはさけんで、もえる木をコウモリになげました。コウモリはそれをうけとってとびました。

「うけとって走れ！」とコウモリはさけんで、もえる木をリスになげました。リスはそれをうけとって走りました。

「ああ、ヘビよ」とふたりのおばあさんはよびかけました。「おまえはアメリカの先住の人たちの友だちじゃないね。手をかしておくれ。リスからもえる木をとりあげておくれ。」

リスが地面をすばやく走っていくと、ヘビがとびあがって、もえる木をうばおうとしました。ヘビはとれませんでしたが、けむりがリスの鼻に入って、リスはせきこみました。それでもリスはもえる木をはなさず、カエルになげわたせるところまで走って走って走りました。

カエルがもえる木をもってにげていくと、リスははじめて自分のことを考えました。すると、美しいふさふさのしっぽが、もうまっすぐではなくなっていました。火のせいで、背中の上にくるんとまるまってしまったのです。

「かなしまないで」とわかものが池の向こうからよびかけました。「しっぽを背中の上にまるめたリスを見たら、アメリカの先住の男の子はいつでも木の実をなげてあげるよ。」

第3部　池の中のもえる木

そのあいだもずっと、もえる木は燃えつづけていて、カエルはできるだけ速く池へ向かっていました。おばあさんたちはカエルをおいかけていて、カエルが水のところまで来たとき、ひとりがカエルのしっぽをつかまえました。

「つかまえたよ！」とおばあさんはさけびました。

「はなすんじゃないよ！」ともうひとりがさけびました。

「ああ、はなすもんか」とはじめのおばあさんは言いました。でも、はなしてしまいました。小さなカエルが体をふりほどいて、水の中へとびこんだからです。しっぽはおばあさんの手にのこりましたが、もえる木はぶじで、カエルはすいすいと池をわたっていきました。

「はい、これだよ」とカエルは言いました。

「どこに？」とわかものはききました。するとカエルがせきをして、口からもえる木が出てきました。ずっともえつづけていたので小さくなっていましたが、それで木の葉や小えだに火がつき、まもなくアメリカの先住の人たちはまたあたたかくなりました。人々は歌いながら、ほのおのまわりでおどりました。

はじめカエルは、しっぽをなくしたのがかなしくてしょんぼりしていました。でもまもなく、おどっている人たちと同じくらい楽しくなりました。わかものがこう言ったからです。「小さなカエルくん、きみはわたしたちのよい友だちだった。わたしたちが地上にいるかぎり、しっぽのないカエルに石をなげたりはけっしてしないよ。」

たんご と クイズ　アメリカの先住の人たちに火がとどいたおはなし

snow 雪	**firebrand** もえる木（たいまつ）	**antlers** （シカの）つの
wolf オオカミ	**pond** 池	**bat** コウモリ
tail しっぽ	**nut** 木の実	

Q1 わかものが火をとってきてとたのんだ動物は？

① クマ　② オオカミ　③ シカ

Q2 リスのしっぽがまるまったのはどうして？

① 火のせい　② ヘビにかまれたから　③ さむかったから

Q3 カエルはもえる木をどこにかくして池をわたった？

① しっぽの下　② アシのしげみ　③ 口の中

こたえ

Q1　②　オオカミは速く走れて、つのもなく、けむりの中に入ったこともないので、わかものはオオカミにたのみました。

Q2　①　もえる木をはこんでいるうちに、火のせいでしっぽが背中の上にくるんとまるまってしまったのです。

Q3　③　カエルがせきをすると、口からもえる木が出てきました。口の中に入れて池をわたったのですね。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Raybrite（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。